

Discrete Mathematics Homework from Handout 2

高橋 知也 / 23TB8303

Homework 7

Homework 7. Prove Theorem 4. (Hint: Notice that any event is a disjoint union of simple events. Consider the contribution of each simple event on each side of the equation and use the fact $0 = (1 - 1)^t = \sum_{i=0}^t (-1)^i \binom{t}{i}$, which is an easy corollary of the binomial theorem.)

解答. Theorem 4(包除原理)は、確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr)$ とイベント $E_0, E_1, \dots, E_{n-1} \in \mathcal{F}$ に対して

$$\begin{aligned} \Pr\left(\bigcup_{i=0}^{n-1} E_i\right) &= \sum_i \Pr(E_i) - \sum_{i < j} \Pr(E_i \cap E_j) + \sum_{i < j < k} \Pr(E_i \cap E_j \cap E_k) - \dots \\ &\quad + (-1)^{\ell+1} \sum_{i_1 < \dots < i_\ell} \Pr(E_{i_1} \cap \dots \cap E_{i_\ell}) + \dots \end{aligned}$$

が成り立つ、という主張である。以下ではヒントに従って証明する。

まず、 Ω の元 $\omega \in \Omega$ を 1 点だけ含む集合 $\{\omega\}$ を「単純事象 (simple event)」と呼ぶ。任意のイベント $E \in \mathcal{F}$ は

$$E = \bigcup_{\omega \in E} \{\omega\}$$

と表せ、右辺の和集合は互いに素 (disjoint) である。したがって、確率測度の加法性より

$$\Pr(E) = \sum_{\omega \in E} \Pr(\{\omega\})$$

が成り立つ。ゆえに、示したい等式は「 Ω の各元 ω について、左辺と右辺における $\Pr(\{\omega\})$ の係数が一致する」ことを示せば十分である。

そこで、ある $\omega \in \Omega$ を固定する。この ω を含むイベントの個数を

$$t = |\{i \mid 0 \leq i \leq n-1, \omega \in E_i\}|$$

とおく。($t = 0$ の場合、 ω はどの E_i にも属さない場合である。)

もし $t = 0$ ならば, ω はどの E_i にも属さないので $\omega \notin \bigcup_i E_i$ である。したがって左辺の $\Pr(\{\omega\})$ の係数は 0 となる。

つぎに $t \geq 1$ の場合を考える。このとき ω は少なくとも 1 つの E_i に属するので $\omega \in \bigcup_i E_i$ であり, 左辺の係数は 1 である。

右辺については, ω を含む E_i が t 個あるので, それらから k 個選んだ交わりには必ず ω が含まれる。そのような交わりの個数は $\binom{t}{k}$ 個である。ゆえに右辺での $\Pr(\{\omega\})$ の係数は

$$\sum_{k=1}^t (-1)^{k+1} \binom{t}{k}$$

となる。

二項定理の結果

$$0 = (1 - 1)^t = \sum_{k=0}^t (-1)^k \binom{t}{k}$$

を用いると

$$\sum_{k=1}^t (-1)^{k+1} \binom{t}{k} = 1$$

となる。これは左辺の係数と一致する。

以上より Theorem 4 が従う。 □

Homework 8

Homework 8. Give an example of pairwise independent events which are not mutually independent.

解答. 次のような確率空間を考える . 標本空間を

$$\Omega = \{1, 2, 3, 4\}$$

とし , 一様分布

$$\Pr(\{1\}) = \Pr(\{2\}) = \Pr(\{3\}) = \Pr(\{4\}) = \frac{1}{4}$$

を入れる . このとき

$$A = \{1, 2\}, \quad B = \{1, 3\}, \quad C = \{1, 4\}$$

とおく .

まず各事象の確率は

$$\Pr(A) = \Pr(B) = \Pr(C) = \frac{1}{2}$$

である . また 2 つずつの共通部分は

$$A \cap B = \{1\}, \quad A \cap C = \{1\}, \quad B \cap C = \{1\}$$

なので

$$\Pr(A \cap B) = \Pr(A \cap C) = \Pr(B \cap C) = \frac{1}{4} = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2}.$$

したがって , A, B, C はどの 2 つをとっても

$$\Pr(\text{積}) = \Pr(\text{片方}) \Pr(\text{もう片方})$$

が成り立ち , pairwise independent である .

一方 , 3 つすべての共通部分は

$$A \cap B \cap C = \{1\}$$

であるから

$$\Pr(A \cap B \cap C) = \frac{1}{4}$$

である . しかし

$$\Pr(A) \Pr(B) \Pr(C) = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2} = \frac{1}{8}$$

となり ,

$$\Pr(A \cap B \cap C) \neq \Pr(A) \Pr(B) \Pr(C)$$

が成り立つ . したがって A, B, C は互いに独立 (mutually independent) ではない .

以上により , A, B, C は pairwise independent だが mutually independent ではない事象の具体例になっている . \square

Homework 9

Homework 9. Let $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr)$ be a probability space and $E \in \mathcal{F}$ an event such that $\Pr(E) > 0$. For any $F \in \mathcal{F}$, define \Pr_E to be the conditional probability

$$\Pr_E(F) = \Pr(F | E)$$

of F given E . Define $\mathcal{F}_E = \{F \in \mathcal{F} \mid F \subseteq E\}$. Show that $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr_E)$ and $(E, \mathcal{F}_E, \Pr_E)$ are both probability spaces if the domain of \Pr_E is chosen appropriately in each case.

解答. まず, 確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr)$ と $E \in \mathcal{F}$ で $\Pr(E) > 0$ を固定する. このとき任意の $F \in \mathcal{F}$ に対し条件付き確率

$$\Pr_E(F) = \Pr(F | E) := \frac{\Pr(F \cap E)}{\Pr(E)}$$

を定義する.

(1) $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr_E)$ が確率空間になること.

ここでは, \Pr_E の定義域を元の \Pr と同じく \mathcal{F} とする. すなわち

$$\Pr_E : \mathcal{F} \rightarrow [0, 1], \quad F \mapsto \frac{\Pr(F \cap E)}{\Pr(E)}$$

とみなす. このとき, 以下の 3 条件を確かめればよい.

(i) 非負性: 任意の $F \in \mathcal{F}$ について

$$\Pr_E(F) = \frac{\Pr(F \cap E)}{\Pr(E)} \geq 0$$

が成り立つ. 分子・分母ともに非負 (\Pr は確率測度, かつ $\Pr(E) > 0$) であるからである.

(ii) 全体集合の確率: $\Omega \in \mathcal{F}$ に対して

$$\Pr_E(\Omega) = \Pr(\Omega | E) = \frac{\Pr(\Omega \cap E)}{\Pr(E)} = \frac{\Pr(E)}{\Pr(E)} = 1$$

が成り立つ.

(iii) 可算加法性: $(F_i)_{i \geq 1}$ を \mathcal{F} 上の互いに素な ($i \neq j$ なら $F_i \cap F_j = \emptyset$) 列とする. このとき, $F_i \cap E$ も互いに素であり

$$\bigcup_{i=1}^{\infty} (F_i \cap E) = \left(\bigcup_{i=1}^{\infty} F_i \right) \cap E$$

が成り立つ . したがって元の測度 \Pr の可算加法性より

$$\begin{aligned}\Pr_E\left(\bigcup_{i=1}^{\infty} F_i\right) &= \frac{\Pr((\bigcup_i F_i) \cap E)}{\Pr(E)} \\ &= \frac{\Pr(\bigcup_i (F_i \cap E))}{\Pr(E)} \\ &= \frac{\sum_i \Pr(F_i \cap E)}{\Pr(E)} \\ &= \sum_i \frac{\Pr(F_i \cap E)}{\Pr(E)} \\ &= \sum_i \Pr_E(F_i)\end{aligned}$$

が従う .

以上より , $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr_E)$ は確率空間である .

(2) $(E, \mathcal{F}_E, \Pr_E)$ が確率空間になること.

つぎに

$$\mathcal{F}_E = \{F \in \mathcal{F} \mid F \subseteq E\}$$

を考える . これは E を全体集合とみなしたときの σ -代数である . ここでは \Pr_E の定義域を \mathcal{F}_E に制限した

$$\Pr_E : \mathcal{F}_E \rightarrow [0, 1], \quad F \mapsto \frac{\Pr(F)}{\Pr(E)}$$

を確率測度として考える ($F \subseteq E$ なので $F \cap E = F$ であることを用いた) .

このときも , 同様に 3 つの性質を確かめる :

(i) 非負性 : 任意の $F \in \mathcal{F}_E$ について $\Pr(F) \geq 0$ かつ $\Pr(E) > 0$ より

$$\Pr_E(F) = \frac{\Pr(F)}{\Pr(E)} \geq 0.$$

(ii) 全体集合の確率 : ここで全体集合は E であり , $E \in \mathcal{F}_E$ である . よって

$$\Pr_E(E) = \frac{\Pr(E)}{\Pr(E)} = 1$$

が成り立つ .

(iii) 可算加法性 : $(F_i)_{i \geq 1}$ を \mathcal{F}_E の互いに素な列とする . すると $\bigcup_i F_i$ も E の部分集合であり \mathcal{F}_E に属する . 元の測度 \Pr の可算加法性より

$$\Pr_E\left(\bigcup_{i=1}^{\infty} F_i\right) = \frac{\Pr(\bigcup_i F_i)}{\Pr(E)} = \frac{\sum_i \Pr(F_i)}{\Pr(E)} = \sum_i \frac{\Pr(F_i)}{\Pr(E)} = \sum_i \Pr_E(F_i)$$

が従う .

以上から， $(E, \mathcal{F}_E, \Pr_E)$ も確率空間になっている。

したがって， \Pr_E の定義域をそれぞれ

$$(1) \mathcal{F}, \quad (2) \mathcal{F}_E$$

と選べば， $(\Omega, \mathcal{F}, \Pr_E)$ および $(E, \mathcal{F}_E, \Pr_E)$ はどちらも確率空間となることが示された。□